が駈けおりてきた。そしてこんな話をしていた。

「昔、ここで巡査が殺されたそうだ。賊をひつぱつてここまで来たら、賊が逃げたんだ。そして川原に入つて、石を投げた。その石の投げ合いで運つたなく巡査は死んでしまつた。賊はまもなく村人に捕えられたが、その巡査の殉職を記念したのが、あの碑なんだ」

私たちは接待にくるまでに、荷をふり分けにして背中に積んだ牛とあつた。その牛をぬいたり、ぬかれたりしながら登つてきたが、時速は何と五粁に充たなかつた。そんな調子でも東餅屋についたときは、いい加減疲れを感じた。

東餅屋は昔本陣のあつたところだ。ゆいしよを記した立札があつたが、それをよむと、いまは本陣は跡を残すのみだとある。峠の茶屋では、餅を売つていた。昔力餅をくわせたので餅屋の名があるが、西側には西餅屋という地名が残つている。

餅は一包一〇〇円であつた。一〇個入つている。それを茶屋の囲炉裏ばたに腰かけながら番茶の接待で食べた。力餅だという感じがした。

バスが上つて来た。茶屋の前で停つたが車掌は後輪にカイモノをかつて、車を後に下るのを防いだ。エンジンが停つたら、検車係の赤い腕章をまいた職員が降りてきて、ハンマーでボテイの下をコンコンと叩いてまわつた。一〇分間の停車だそうだ。

「バスだとこの峠を越えるのにどのぐらいの時間がかかりますか?」

とたずねてみた。検車係氏は

「二時間四〇分かかります」

と答えた。私たちが長い時間を要したのも無理はない。八時に宿を出て、ここについたのが十一時半をまわつていたのだ。

ウイスキーのポケツト壜につめた蜂蜜を買つた。一〇〇円である。

「山本君がその壜を持つたんじや、蜂蜜だつていつても、誰も信用しないぜ」

と今井氏が笑つていた。

頂上は東餅屋から一粁ほどだ。自動車道は土砂が崩れるのでトンネルにしてある。最初の部分はコンクリートの円筒がむき出しになつていて、つぎ目から日ざしがこぼれて、道の上に縞目をつけている。トンネルを出ると、和田峠の頂上を示す標木があつた。はるか前方の山のむこうに、雪をいただいた木曾駒が五月の太陽をはねかえして、キラツと光つていた。

大部下つたところに芝生のきれいなところがあつた。水戸浪士の墓である。藤村の「夜明前」の第一部下であつたと思うが、武田耕雲斉のひきいる水戸浪士と、浪士の道をふさごうとする諏訪、松本両藩連合軍との激戦の模様が生々とかかれてあつた。馬籠本陣の青山半蔵の心をゆるがした大事件を芝生に寝ころんで想い起したが、そんな物語を思うに恰好な静かな所だつた。

道は諏訪湖をめざして、下る一方だつた。

塩尻峠

塩尻峠は八ガ岳のよく見える峠だ。下に諏訪湖が、そして岡谷と諏訪の町が光り、遠くに八ガ岳の雄大な連峯がたたなわり、八ガ岳の裾野の果の少し右に富士が頭をのぞかせる。今年の塩尻峠はそれほど素晴しい眺めであつた。

五年前の五月、この塩尻峠は雪であつた。私の持つた来た寒暖計は零下一度を記録した。私のアルバムにある塩尻峠の写真の一つに、興津武雄さんが交通標識に吹きつけた雪に、指でNCTCと書いたのが貼つてある。

今年の塩尻峠は、路面がよくなつた。八割方は完全鋪装である。雪の中を一踏み一踏み登つたことを思い出すと、おかしいくらいに軽い登りであつた。

峠の上には松本電鉄バスの観光バスが多勢の観光客を運んできた。峠というより展望台といつた方が塩尻峠によく似合うようだ。

鳥居峠

木曾の鳥居峠は、奈良井川と木曾川にはさまれている。日本海に入る奈良井川が北上し、平行して太平洋に入る木曾川が南下している。分水嶺だ。

鳥居峠は木曾路の中にある。峠の東の奈良井部落には、

送られつ送りつ果は木曾の秋

という芭蕉の句碑が立つていた。そして峠の西の藪原には、木曾の中でも最も木曾らしい板屋根が軒をつらねていた。どちらをむいても木曾である。違うといえば松本から来たバスは奈良井で終点になつていて、

日はよく晴れていて、黄水仙が滅法明るく眼を刺した。小高い所へ登つて石碑を読んでいた今井氏

JCA推薦

パンクに

そなえて

一台 一ケ

EARTH

PATCH RUBBER

MARUNI IND. CO. LTD

チキユーパッチ No3

ほかの中山道の峠のようにバスが通つていないことだ。西には西のバスがある。冬は雪で交通不能になるという。いまはトンネルが出来たそうだから、或はバスも藪原へ抜けているかも知れない。

上松の宿の主が、オートバイで鳥居峠を越えて奈良井まで迎えにきた。後に「歓迎NCTC十周年記念ツアー」と書いた旗を立てていた。いかにも昭和三〇年らしい。というのは当時、サイクリングは殆ど人に知られていなかつたからである。

鳥居峠には鳥居峠の旅情もあつたはずである。僅かに峠の頂上、御岳山遥拝所に立つて御岳を望み、木曾駒を探したことを覚えている。あとは車のことが想出を占領しているのである。

車は光風のロードレーサーで、昭和二八年の東京大阪間プロ・ロードレースに使つたもので、払下品である。クロモリのチューブも自慢であつたが、少し大ぶりのマース型のドロツプバーも得意であつた。エンドリツクリムも珍しければ、一¾吋のWOタイヤも得意であつた。何よりも自慢の種は、3/32吋のチエンと、五〇T×四七Tのレーシング・タイプのダブルチエンホイールと、一四、一六、一八、二〇というボスタイプのマルチプル・フリーであり、テコ式のフロントデイレーラーと、三光舎のレーシングタイプのリヤデイレーラー、そしてクイツクレリーズハブという、豪勢な仕立である。あまり威張れないのは、後で無理につけた鉄製の、マスコツトのついたマツドガードだけであつた。

私が、この自転車に疑問をもつたのが、すなわち鳥居峠である。レース用であるため、八段の変速機も四四×一九というシングルの実用車よりも、ギヤ比が高くて手に負えなかつた。とりわけ鳥居峠の登りではそれがこたえた。木曾路は木曾川を下つてはいるが、沢に出るたびに道は下り、沢を越えると坂を上るという具合で、およそ平なところがない。ゆうに三日間というものは、高いギヤ比に悩まされたことであつた。鳥居峠の登りなどは、クランクの回転をとめないようにするだけで精一杯であつたといつても過言でない。

当時、サイクルからNCTC編のサイクリング・ハンドブツク・ツアー篇の初版が出てまもないころだと思うが、有効なペダリングの一項を思い出して、アンクリングでクランクをとめないように努力したことであつた。今ならおそらく、そんな無理をしまい。やはり私は若かつたと思う。そんな鳥居峠であつただけに、山田鉛雄さんのFWが魅力だつたし、横尾双輪館の横尾明さんがBSAのハブギヤだが、チエンホイールを四四に落してきたことに感心したりした。

驚いたのは、興津武雄さんのワイドレイシオのダブル・チエンホイールであつた。まるで平地を走るような恰好をして、するすると峠を登つてきた。650Bという太いタイヤの魅力も、この峠では、感じたことである。とにかく私は木曾路で自転車の勉強を余儀なくされたわけである。私はそれ以後この車はツーリングには使わないようになつたし、私の性凝りのないまでの自転車作りの道楽の発端も、いまにして思えば、この鳥居峠をはじめとする木曾路のツアーにあつたらしい。

7・木曾

木曾の想出は酒の想出である。上松の旅館でくつろいだ時のビールのうまさは格別だつた。大体がNCTCのメンバーは下戸が多い。だから一本づつのビールももて余し気味だつた。それを私はもて余さなかつたわけである。昨夜が夜行列車で眠れなかつたのと、塩尻、鳥居の二つの峠をこえ、その夜ナイトランとなつたのだから、飯もそこそこに眠くなつてしまつた。その後を私は全然覚えていない。木曾をたずねたのは昭和三〇年であるが、当時はまだサイクル・ツーリングが珍らしがられていたので歓迎もまた手がこんでいて、上松の有志が正調木曾節をきかせ、木曾踊をみせるという段取になつていた。私の頭の上で、正調木曾節が唄われ、スポツトライトを浴びて木曾踊をやつていたのだが、私には、木曾の木の字も聞えなかつたのだから仕末が悪い。すつかり踊りも終り有志の人たちが帰つた後で、女中が寝床を敷こうとして私を起したが、そのとき

「うるせえ！」

とどなつたという次第である。自分の声で眼が覚めたがおかげで木曾の話が出れば、五年たつても正調木曾節を聞かない唯一人の男として話題にのぼる。翌日、浦島太郎の伝説のある寝覚の床についたら、山田鉛雄氏から

「山本君、酔覚の床だぜ」

といわれた。爾後、私は酒のみの序列に入れられたことである。

そんな失敗を演じたが、木曾はいまだに忘れられない。どこがどうという細かいことは忘れ果てた。しかし藪原の町に最も多くみられた板ぶきの屋根も印象的で

曽木

て縄に通した味噌が台所にたくさん吊り下げられていたが、それをたいてくれたわけ

ものである。いまだに大事にしまつてあるが、そんな土産を買う気にならせるのも木曾である。

が、今日に比べてどれほど苦しかつたか知れない。更にダブルチエンホイールの普及である。ワイドレイシオのダブルチエンホ

てクイックレリーズハブという、豪勢な仕立である。あまり威張れないのは、後で無理につけた鉄製の、マスコットのついたマ

いことは忘れ果てた。しかし藪原の町に最も多くみられた板ぶきの屋根も印象的であつた。栗の板をのせて、石でおさえてあるだけの簡単なものだが、坪二千円かかるとかで、最近ではトタンに替りつつあるとか。

、

島崎藤村の「夜明前」の冒頭に

「木曽はすべての山の中である」

とある。私はこれほど木曾をよく説明した言葉はないと思つた。だから、藤村の画いた木曾のあれこれも、みてまわりたいと今でも思つているが、それほどの悔を残すような急ぎ旅でもあつた。福島の関所跡も聞いてもみなかつたし、賤の掛橋も高くからみただけだし、妻籠の本陣も、馬籠の部落にもいかなかつた。それでも、木曾はすべて山の中であるという実感を味わうことは出来た。そんな急ぎ旅ではあつたが、定勝寺という寺だけは、実にゆつくり遊んだ。重要文化財に指定された建物であるが、庭を美しくはききよめ、手入のよくゆきとどいた寺で、貧しげな木曾には似つかわしくないと思えるほど立派であつた。寺の格式の高さを語るものに駕籠があつた。昔、住職が使つたというその駕籠は、本堂の脇の廊下に吊つてあつたが、大名が使うそれと似て立派なものであつた。

私たちが定勝寺に長居をしたのは、昼飯を頼んだからである。味噌汁とワラビだけの簡単な食事であつたが、みんな驚くほど食べた。二十日味噌といつて、玉ころにして縄に通した味噌が台所にたくさん吊り下げられていたが、それをたいてくれたわけである。木曾の味として、いまだに忘れられないものである。

定勝寺は木曾義仲の菩提寺であるという。ところが木曾には、もう一つ義仲の菩提寺があり、両方が菩提寺争いをしているとか聞いた。考えてみれば木曾で有名になつた人は開びやく以来、木曾義仲と島崎藤村だけだといわれるくらいであるから、義仲の菩提寺を争うのも故なきにあらずといえるだろう。

徳音寺を訪ねたのは、前の日の夕暮であつた。武家造りの桓をめぐらした寺だが、巴御前の墓もあり、木曾の生んだ武将の菩提寺にふさわしい雰囲気ももつていた。私たちが一巡して表に出たとき、一人の年老いた寺男が帰つて来た。背負子に麻袋をつけて心持ち腰をかがめていた。私たちは寺男の話をききはじめた。いま彼が何を語つたかを思い出すことは困難である。けれども、ようやく暮色につつまれた徳音寺の門前で、義仲の昔から伝えられた、いろいろな話をゆつくり話す寺男の姿は、一幅の絵のように美しかつた。木曾で会つた人の中で、もつとも忘れ得ぬ人は、あの寺男だと私は今でも思つている。

多分上松で買つたのだと思うが、私は珍しく土産を買つて家へ郵送した。ネズコのウチワという。ネズコは木曾の五木のうちの一つであるが、全然紙を使わない風雅なものである。いまだに大事にしまつてあるが、そんな土産を買う気にならせるのも木曾である。

あとがき

東京から名古屋までの道の五カ年を回想してみると、五年間という歳月が、決して私の個人の回想にとどまるものでないことに気がつく。サイクリング界の五カ年がふつふつとして想い出されるからである。

五年前、岡谷の駅を降りて木曾路にハンドルを向けた頃は、「競輪か?」「競走か?」等の言葉をしきりに耳にした。それが今年の塩名田のハヤ料理屋のおかみが、「サイクリングでお出ですね」

というようになつたし、和田の部落のような辺鄙な所でも、ちやんとサイクリングであることを理解していた。もはや、世の人々はサイクリングという外来語に抵抗を感じなくなつているし、サイクリング用車という特別の車を奇異の眼でみたとしても、これがサイクリング用車であることを容易に理解するようになつた。旅は、地方にどれほどサイクリングが理解されているかを知るにもよい機会であつた。

また五年の歳月は自転車をも前進させた。五年前のW／Oタイヤはソーヨーが一¼吋とダンロンプが一⅜吋が手に入つた程度だつた。それが、今日では選択の自由が生れてきている。キヤリパーブレーキも当時はフツデツドレバーがなかつた。だからマース型ドロツプでダウンヒルをやることが、今日に比べてどれほど苦しかつたか知れない。更にダブルチエンホイールの普及である。ワイドレイシオのダブルチエンホイールの市販は、サイクリストを高い所、高い所へと登らせた。私たちは楽に峠を越えることができるようになつた。まだまだ、自転車に不満が多いにしても、ふりかえつてみるとき、感慨無量なものがある。

最後に、私が東京から名古屋まで五年もかかつたということについて若干の説明をしておきたい。それは、一つには私には長い休暇をとることができないからである。だが、より重要なことは、私は旅には時間をかけたいということである。すなわち、ゆつくりと走ることである。およそ旅に出て自分の眼で物を見ないことほど、おろかしいことはない。指導標にひきずられ、案内書を読むだけで名所を理解するならバスでいつた方が得策だ。自転車でなければ摑めぬものを私自身の眼で見たいというのが私の念願である。だがふり返つてみると、私の五年間の旅は私の念願どおりに行つているとはいい難い。帰つてきて悔まれることも少くない。旅とはそんなものでもあろう。

私は今後もまた、同じように旅を続けるであろう。いつの日にか東京と米沢が結ばれ、仙台から盛岡がつながるかも知れない。

私はそうした旅の中に、人生の糧をみつけていこうと思つている。

酒のみの序列に入れられたことである。

そんな失敗を演じたが、木曾はいまだに忘れられない。どこがどうという細か